www.printo.it/pediatric-rheumatology/JP/intro

ライム関節炎

版 2016

1.ライム関節炎とは

1.1どんな病気でしょうか？

ライム関節炎はボレリア・ブルグドルフェリという細菌の感染によって引き起こされる病気(ライムボレリア症)のひとつで，イクソーデス属マダニに刺されることで感染します。
ボレリア・ブルグドルフェリは皮膚，中枢神経，心臓，眼などの様々な臓器に感染しますが，ほとんどのライム関節炎の患者さんでは関節だけに感染しています。その場合でも経過中に，遊走性紅斑という皮膚症状（マダニに刺された部位から赤い皮疹が広がる）を認める場合があります。
ライム関節炎を治療せず放置した患者さんでは，頻度は低いですが中枢神経系症状へと進行する 可能性があります。

1.2ライム病の頻度はどのくらいでしょうか？

関節炎を発症したお子さんのごく一部の原因がライム関節炎です。ヨーロッパでは，細菌感染が原因でおこる小児や若者の関節炎で最も頻度の高いものです。おもに学童期のお子さんにみられる病気なので，3歳以下のお子さんがかかることは，あまりありません。
ヨーロッパの全域で発生しますが，とくに中央ヨーロッパやバルト海周辺の南スカンジナビアで流行します*。4月から10月にかけて（気温や湿度の条件で）活発に活動するボレリア・ブルグドルフェリに感染しているダニに刺されることで感染しますが，感染してから関節が腫れ始めるまで長時間かかるため，ライム関節炎は1年を通じてどの季節でも発症する可能性があります。 *日本では本州中部以北（特に北海道および長野県）で発症します。

1.3病気の原因は何でしょうか？

イクソーデス属マダニに刺されることで体内に侵入する，ボレリア・ブルグドルフェリという細菌の感染により生じます。ほとんどのマダニは細菌に感染していないので，マダニに刺されても多くの場合は病気に罹りません。遊走性紅斑を発症しても，ライム関節炎がみられる第2期以降の症状に進行する訳ではありません。
遊走性紅斑がみられる早期の段階で抗菌薬による治療を受けることが大切です。このような背景があるので，毎年最大1000人に1人の小児がライム・ボレリア症による遊走性紅斑を生じ得ますが，進行期の合併症であるライム関節炎の発症は滅多に起こりません。

1.4遺伝する病気でしょうか？
ライム関節炎は感染症なので，遺伝はしません。抗菌薬による治療を受けたにも関わらずライム関節炎を発症しやすい体質があることがわかっていますが，その詳細なメカニズムはわかっていません。

1.5なぜ，私の子どもがライム関節炎になったのでしょうか？ それを予防することは出来たのでしょうか？
マダニが生息するヨーロッパでは，子ども達がマダニに刺されないようにするのは困難です。じつは，多くの場合ダニに刺されてもボレリア・ブルグドルフェリはすぐには伝播しません。細菌がすでにマダニの唾液腺へ移動していた場合でも，唾液とともに人間などの宿主へ侵入するまでに，数時間から１日程度かかります。マダニは3〜5日間宿主に付着し，血液を吸い続けます。夏季に毎晩お子さんにマダニが付着していないかを確認し，すみやかに取り除いてあげれば，ボレリア・ブルグドルフェリの伝播は，ほとんど起こりません。マダニに刺された後に予防的に抗菌薬を服用することは，推奨されていません。
しかし，感染初期症状である遊走性紅斑が生じた場合には，抗菌薬による治療を受けるべきです。この治療は細菌のさらなる増殖を防ぎ，ライム関節炎を予防するでしょう。米国ではボレリア・ブルグドルフェリのひとつの菌種に対するワクチンが開発されましたが，接種を希望する人が少なく発売中止になりました。アメリカとヨーロッパで流行する菌種が異なるため，このワクチンはヨーロッパの人にとっては有用でありません。

1.6人から人に感染する病気ですか？
この病気は感染症ですが，細菌はマダニから人に伝播するので，人から人へ感染が広がることはありません。

1.7主な症状には，どのようなものがありますか？
ライム関節炎の主な症状は，関節液が貯留したために生じる関節腫脹と関節の可動域制限です。関節の腫脹が目立ちますが，関節痛は無いかあっても軽度です。膝関節が最も高頻度に冒されますが，他の大関節や時には小関節も冒される場合があります。膝関節にまったく症状を呈さないことは稀で，3分の2の患者さんでは膝の単関節炎です。95%以上の患者さんが少関節炎（4関節以下）の経過をたどり，しばしば膝関節炎のみ遷延します。3分の2の患者さんでは，ライム関節炎は「不規則な間隔で時おり生じる関節炎」として発症します。すなわち，関節炎は数日から2〜3週間続いた後で自然に消失しますが，まったく何の症状も認めない期間の後に，再び同じ関節に関節炎が再燃するのです。
時間が経過するにしたがって，関節炎を生じる頻度は減少し，関節炎の持続する期間も短くなるのが一般的ですが，関節炎の頻度が次第に増える症例や，最終的に慢性関節炎になってゆく症例もいます。例外的ですが，はじめから3ヵ月以上遷延する慢性関節炎として発症する症例もいます。

1.8どの子にも同じ症状を認めますか？
いいえ。関節炎は，たった1回のエピソードしか認めない急性関節炎，症状を反復する関節炎

，あるいは慢性関節炎など様々です。関節炎は、小さいお子さんではより急性の，思春期のお子さんではより慢性の経過をたどります。

1.9小児の症状は，大人の症状と異なりますか？

ライム関節炎の症状は，大人も子どもも似ています。しかし，低年齢のお子さんのほうが経過が早く，抗菌薬治療が効きやすいです。